

キムラ緑子さん●女優

人、とき、作品——出会いには必ず意味がある

「きらり」と光る人。軽々と生きているように見える内側で努力を怠らない人。もつと知りたいと思わせる人。それがキムラ緑子さんという女優ではないでしょうか。近年は新国立劇場の芸術監督・栗山民也氏ら、そうそうたる演出家から出演を要望される実力派ですが、これまでの道のりは不思議な偶然や人との縁に導かれたものだったそうです。数々の出会いを大切にしてくられたキムラさんに、20余年の演劇人生を伺いました。



きむら みどりこ
兵庫県生まれ。1984年女子大学学芸学部英語英文学科卒業。87年、劇作家・演出家マキノノゾミ氏（84年同志社大学文学部文化学科卒業）の主宰する劇団M.O.P.旗揚げに参加。現在もM.O.P.の看板女優として、舞台、映画、テレビなど多方面で活躍中。87年、05年に「十三夜会賞・個人賞」、97年「第32回紀伊国屋演劇賞個人賞」、05年「第12回読売演劇大賞優秀女優賞」受賞。04年には映画「パッチギ！」（井筒和幸監督）、06年はNHK連続テレビ小説「純情きらり」、新国立劇場公演「夢の痲（かさぶた）」（井上ひさし作）などに出演。本人公式ブログは <http://mopkimura.exblog.jp>

偶然にして衝撃的な演劇との出会い

——「純情きらり」でのピアノ教師役は、辛辣さの中にも師としての愛情を感じさせる、きりりとした演技でした。

キムラ ありがとうございます。私も昔ピアノを習っていました、プロフィールの特技欄にも「ピアノ」と書いていたのですが、実はもう指は全然動かなくなっています。あわてて通販でデジタルピアノを買って練習しました（笑）。

——その甲斐あって、画面でも腕前を披露されました。

キムラ 主人公の前でお手本を見せるシーンがあったのですが、リハーサルでは全然だめ。どうしようと思いましたが、本番では無事に弾けて、ほっとしました。

——普段は舞台でのご活躍が中心で、昨年は読売演劇大賞を受賞されました。どのような演技が評価されたのですか。

キムラ あの賞は、海外で話題になっていたフランス人劇作家ヤスミナ・レザの作品『偶然の男』での演技に対していただいたものです。男と女の二人芝居なのですが二人の会話ではなく、大半が互いの独白で構成される、難しいお芝居でし

た。膨大なセリフの量に最初はどうしようかと思つたほど。あれは本当に努力しましたので、受賞を知った時は驚いたというよりも「報われた、ありがとうございます」という思いでした。あんな面白い作品に出合えることも滅多にありませんし、それを長塚京三さんという素晴らしい俳優さんと一緒に演じさせていただけことも、非常に運がよかったのだと思います。

——演劇との出会いをお聞かせください。

学生マンションに入居していた友人が演劇部に入りたいと言うので私もついていったんです。それが「第三劇場」で、ちょうどマキノノゾミたちが「熱海殺人事件」のリハーサルをしていました。稽古ではなくリハーサルですから、皆さんメイクをして衣装をつけ、照明も入っている。いきなりそんな本格的な芝居を観て、「こんな世界があるのか！ このエネルギーは何なの？」と。

——それで演劇にのめり込んでいかれた。

キムラ 第三劇場に入った時はマキノをはじめ先輩たちから学ぶことがたくさんありましたし、気の合う仲間もいたから芝居を続けていましたが、学生時代はそれほど強い意志をもって演劇に打ち込んだわけではありません。もともと大学に入る時、父から「学生運動だけはするな」と言われたのですが、学生運動も学生演劇も似たようなもの。運動がまだ激しい頃に大学生になっていたから、私もそこに身を投じていたかもしれません。つまり、強いショックを受けると背中を向けてしまふ人もいますが、私はショックを受けると「もつと知りたい、見たい、聴きたい」と思う性格なんです。演劇を知った時も同様でした。生まれ育った淡路島で

は刺激が少なかったもので、都会に出てきて、毎日大学に行くこと自体がスリリングだったんです。あれも見たい、これも見たい。そのわりには何も考えていなくて、入ったサークルも男子学生と一緒にピクニックにいったりテニスをしたりする、合コンクラブのような気楽なところでした。「女子大生」を堪能しようと思

いまして（笑）。将来なりたい職業もなく、まだ自分探しの時期だったのです。だからなおさら、演劇の世界が新鮮だったのだと思います。

——卒業後はどうされたのですか。

キムラ 淡路島に帰って3年間、塾を経営して数学と英語を教えていました。芝居に対する未練はほとんどなかったです。たまに京都へ芝居を観にいった程度。ところがある日船の中で、淡路島に帰るのがとてもいやになった。そういう思いが、芝居を観にいくたびに強くなっていく。そしてあるときマキノから連絡があり、主役の女の子が突然いなくなった、君が出てくれないかと。いったんは断つたのですが、次の1本だけ手伝ってみようかなという気持ちになり、友人に塾を任せて京都へ行くことに決めました。親には猛反対されましたが、身の回りの荷物だけ車に積み込み、家出同然

で京都にきました。それからは芝居ひと筋です。

幾人もの支援者に恵まれた幸運がその後の道を拓く

——京都ではご苦労が多かったですか。

キムラ 貧乏でした。でも本当に数多くの方々にお世話になりました。なかでも、熊野神社近くにある「ピイヤント」というカレー屋のご主人夫妻は忘れることができません。芝居のスケジュールに合わせて皿洗いのバイトをさせていたのですが、公演が近づいて稽古が忙しくなるにつれてバイトに入る日が減ってくる。すると「生活が大変だろう」ということで、逆に時給がどんどん上がっていきんですよ。ご飯が食べられない時は店に食べにこいとも言ってくださる。演劇を続けてくれた人たちには多かれ少なかれ、たぶんそういう応援者がいます。京大の近くにある店だったので、学生を応援するという風土もあったのでしょう。出町商店街にある「漢方いちじょうじ」という薬局でもアルバイトをしていましたが、マキノが大病をした時に高価な薬をたくさんいただいて、大変お世話になりました。

下鴨にあった「アートのスペース無門館

（現・アトリエ劇研）「も思い出の場所です。代表の遠藤寿美子さん（故人）は非常にバワフルな演劇プロデューサーで、若い演劇人を育てるんだとおっしゃって、いつも私の背中を押してくださいました。マキノと共に京都に何の知り合いもなかった私たちがこまで来られたのも、元をたどれば遠藤さんのお力である方々に結びつけていただいたから。二人でニューヨークへ演劇の勉強に行つて貴重な体験ができたのも、遠藤さんの助言と紹介があったからです。」

——さまざまな人々の支援を受けながら、演劇人として成長していかれたのですね。

キムラ 最近ようやく自然に感謝の気持ちが湧いてきました。若い頃は自立するためになりふり構わなかったので、人を傷つけてしまったり、自然と縁遠くなつてしまった人もいましたが、いつも誰かに呼ばれたり誰かと出会つたりしながら、こまで来たような気がします。それでも、初めて自ら演劇で生きていくと決めたのはマキノと結婚した時でしょうか。自分の夫がこういう仕事をしているから、仕方ないかなと（笑）。今は芝居が楽しいと思います。

考えるようになりました。「今」というときを考えるようになりました。

多方面でさらに経験を重ね、人々の印象に残る俳優を目ざしたい

——いったん舞台に立てば、そこは逃げ場のない場所。公演中はどのようにして集中力を持続しておられるのですか。
キムラ 若い頃は本番中に弱気になつてしまい、泣きながら芝居を終えたこともあります。今でも極度の緊張感に襲われることがあります。そういうものだと思います。それはどんな仕事でも同じではないでしょうか。すべては気持ちの問題。舞台の上で弱気になつたら、どれだけ稽古ができていても、もうだめ。一瞬他のことに気を取られると、それだけで集中力がそがれます。それでは仕事にならないので、本番前は苦手な人とはしゃべらないとか、必ず決まった好物を食べるなどして、集中できる自分をつくっていくように心がけています。

——舞台には客席の反応が直に伝わると思えます。そこには何が生まれますか。
キムラ コミュニケーション。それが一番大きいですね。初日の舞台に立つと、今まで稽古でつくってきたことがいったんパーンと開く。広がる。それがお客さ

外部での仕事で得た力を劇団の活動に還元する

——結成時から参加しておられる劇団M.O.P.についてお聞かせください。

キムラ M.O.P.の仲間、もう付き合いが長いので家族みたいなものです。そして一つの作品を仲間と共に1から立ち上げ、手をかけていくと、それは何ものにも替えられない大切なものになります。彼らとは喧嘩しますが、気心の知れた仲間だからこそ摩擦をプラスにできるのではないのでしょうか。私はM.O.P.の外でもさまざまな仕事をしていますが、外で率直な意見を出し合つて作品をつくるのは意外と難しいものです。自分が求められていることをきっちり演じて帰る。それが外での仕事。でもM.O.P.では何の利害関係もないので、各自がやりたいことを自由に出し合った上で全体の方向を決めます。意見が異なることも当然ありますが、それが面白いんです。

——ぶつかつてこそ、という世界。

キムラ 外で仕事をしていろいろな経験をして、ぶつかる力を得てM.O.P.に帰ってきた。そうでなければ仲間も物足りなく思うでしょう。だから一銭にも

ならない集団が、いちばん力をつけていたりするんです。

——無気力な若者が多いといわれる時代ですが、劇団の後輩の方たちは情熱をもつて生きておられる。素敵な世界ですね。

キムラ 芝居をすることが仕事になつていく人もいますが、アルバイトしながら芝居を続けている人もいます。私たちが引つ張ってきたので申し訳ない気持ちもあります。なかなか続けていけない世界ではありますね。

——キムラさんも情熱的な方とお見受けします。

キムラ 先日、芝居のために音楽のレッスンを受けていて先生に言われました「頑張りやさんね」と。もつと肩の力を抜きなさいということですね。もつと大きな声が出せるんじゃないか、もつと大きな声が出せるんじゃないかと頑張ると、「そこまで歌わなくていい。みんなと合わせてください」と（笑）。私自身、どんなに不格好でも頑張る人が好きだし、自分もそうでありたいと思つています。ただ、自分では頑張りすぎている部分を認めた上で、もう少し力が抜けるといいですね。最近はいくちか立ち止まって、今やっていることや、出会った人たちにはどんな意味があるんだろうと

んに伝わる。稽古場で仕上げた芝居をお客さんと一緒に、また違うものにつくり変えるんです。お客さんのエネルギーはすごいし、演じる力になります。だから早くお客さんに見せたいと思いますね。

——インターネットでブログを書いておられますね。

キムラ お恥ずかしい（笑）。M.O.P.は結成20年を超えながら、昨年動員数が増えました。こんな中年劇団でもまだお客さんが増えていることに一同感動して、動員数を1万人にしようという目標を立てました。そのためにはお客さんとのコミュニケーションをもつと密にして私たちの現在の活動に興味をもつていただこうということで、M.O.P.のホームページで自分のブログを公開しています。

——舞台、テレビ、映画と多方面でご活躍ですが、それぞれ演じ方や心構えには違いがありますか。

キムラ 難しい質問ですね。自分のする芝居そのものは変わらないと思います。ただ、舞台からスタートしましたので、映画やテレビは私にとつてはまだ難しいです。舞台では頭のとつぺんから爪先までお客さんに見えていますね。でも映像では、複数のカメラが異なる角度から撮

影します。で、今何をすべきかを現場で的確に判断する必要があります。動きすぎてカメラからはみ出すこともありますよ。カットごとに撮影するので、その瞬間に感情移入することも求められる。初対面の俳優さんと何十年来の夫婦であるかのように演じるのは難しいものです。もつとも、映画やテレビはそれほど数多く出演したわけではありませんので、舞台と比較できるくらい映像の世界でも経験を積みたいと思つています。多様な監督さんから学ぶことも多いですから。

——お話を伺つていて、たいへん前向きな印象を受けました。お好きな言葉があれば教えてください。

キムラ 「人生を『好き』でかためる」。人生にはいやなこともあるけれど、同じいやなことをするのなら、少しでもそれを好きになりたい。お仕事も「来たものを撃つ！」というのが私のスタンスです。かかつてこい（笑）。今後はさらに「こんなことを演じさせてみたい」「こんな役ならあの人に」と、大勢の俳優の中から思い出したいだけ存在になりたいですね。そのためには今何をすればいいんだらうと、毎日考えているところです。（聞き手・當村まり、5月25日東京會館）

今城慰作さん●牧師

死に学び、生を学ぶ ―緩和ケア病棟での日々

長野市にある愛和病院には、末期がん患者とご家族のクオリティ・オブ・ライフ（生命の質、生活の質）の向上を目指す緩和ケア病棟があります。医学的に苦痛を緩和するだけでなく、心と魂のケア（スピリチュアルケア）にも強い関心を寄せる、全国でも数少ない病棟です。そこにチャプレンとして勤め、今まで約8000人の方を看取ってこられた今城さんに、人間らしい最期とは、そのために周囲の人々ができることは、そして死か、私たちが学べることは何かをお話しいただきました。



いまじょう いさく
1971年大阪府生まれ。96年大学神学部卒業、98年同大学院神学研究科博士前期課程修了。共著に『神に呼ばれて』（日本キリスト教団出版局、2003年）、長野大学・編『いのちの対話』（郷土出版社、2006年）など。日本キリスト教団教師、医療法人愛和会愛和病院勤務（チャプレン兼ボランティアコーディネーター）。

患者さんが尊重されながら
死を迎えられるために

―愛和病院で行われている緩和ケアについてお聞かせください。

今城 死は患者さんの大切な命を奪うだけでなく、周囲にいる大切な人との関係性をも奪います。死に至る過程は千差万別ですが、その悲しみを理解し分かち合い、その人がありのままの形で尊重されて死を迎えられるようなケアを心がけています。患者さんだけでなく、ご家族のお話を聞くこともあります。私が話をすると、というよりも、「聞く」ことが中心で

すね。牧師というと説教したり、懺悔させられたりするのじゃないかなどというイメージが患者さん側にはあるようですが、そうではなく、辛いことがあれば語ってくださいという形です。

―患者さんはキリスト教徒ではない方が大半だと思いますが、今城さんはどのようなお立場で患者さんのお話を傾けておられるのですか。

今城 大切なのは、患者さんがご自身の言葉で語ること。その人の人生の中に、その人が与えられた感謝できる出来事や宝を見つけ、傷ついた思いを語り、苦しんでいる思いを自分の言葉で語ってくだ

さることです。その言葉に耳を傾けるのが私の役目。火曜に行う礼拝ではキリスト教の話をしますが、普段病室をお訪ねする時は、求められない限りは私からキリスト教の話をすることはありません。患者さんと話をしているとき、患者さんの側からキリスト教の話を聞きたいと、尋ねてこられることがあります。死んだらどうなるのか、なぜ自分は生まれきたのか、なぜ死ななければならぬのか。どうしても救せない相手をどうやって赦したらいいのかとか。亡くなる前はいろんな感性が研ぎ澄まされた状態になる方も多いので、今までと違った形で

人生を捉え直すのだと思います。強い人間を目ざしたり、お金をたくさん集めることに力を注いだり、色々なことにこだわったりしたけれど、実はそんなことは大したことではなかったと考える方もおられますね。患者さんが長いお話をされた後に、共に祈りをすることもあります。そして「最後に一緒にアーメンって言ってくださいね」と言うと、それまでこらえていた涙をどつとあふれさせる方もおられます。

―私たちは誰しも自分の死に際して安らかな最期を望んでいます。望ましい死」とはどういうものとお考えですか。

今城 一般論として語るにはあまりにも難しい問題ですが、自分の人生に意味があったと自分で納得できれば、それは望ましい形だと思っています。しかし著書『死ぬ瞬間』の中で、有名な「死の五段階（否認・怒り・取引・抑うつ・受容）」を唱えたエリザベス・キューブラー・ロス博士でさえ、亡くなる前の2年間は神や愛を否定するようなことを言ったり、周囲に当たり散らしたりしたことをテレビの特集で見たことがあります。彼女でさえ聖人のような死を迎えなかったというのは、私たちにとっては少し救われたかなという気になりますね。必ずしも死を受容し恐怖や不安を口にせず、いろん

な制約（こうあらねばならない）の中で死んでゆくのではなく、ネガティブなこと、感謝の気持ちなど、ありのままを言いつて誰かがそれを受け止めてくれる環境にあるということもまた、望ましい死といえるのではないのでしょうか。

悲しむ人と共にいること、
人間の限界を見極めること

―最期を前にして何を求めるかは人それぞれかと思いますが、それを見極めるのは本当に難しいことでしょうか。

今城 最近ようやく分かってきたことですが、何かをしてあげるといふより、同じ人間という立場に立って、そこに「共にいる」ことが一番大事なのかなと。援助する側にも結局大きな無力感があるんですね。でも、それでいいのじゃないか。無力でありながらも逃げないでそこに居続ける、その人の前に立つということが一つの力になるのではと思えるようになりました。

―遺族には大切な人を失った悲しみに加えて、もっと自分にできることがあったのではと自分を責める、二重の苦しみもあると思います。

今城 自分や病院を責めたり、「どうして私を残して逝ってしまったのか」と故人を責めたり、神や仏を非難する人もい

ます。悲しみを十分味わい尽くさないと、私たちは生きる力を取り戻せないのではないのでしょうか。スタッフの仕事は悲しみを治療するとか回復させるということではなく、むしろその人と共に悲しんだり、悲しみと向き合うための援助することなのです。この病院では月に一度ご遺族の会を開いてグリーフケアを行ったり、年に一度、一年間に亡くなった方のご遺族をご招待して記念会をしたりしています。患者さんが亡くなった時はお別れ会をします。ご遺体を囲み、ご家族やスタッフが讃美歌を歌い、故人の思い出を皆で語り、お祈りをする。もちろんキリスト教式の会ですが、ほぼ95%の方のご家族が承諾してくださいます。病院で仲良くなった別の患者さんが参列されることもあります。

―大変なお仕事の中で、今城さんご自身の心のケアはどうしておられますか。

今城 私が心がけているのは、自分の限界を自分で見極めること、スタッフ全員で支え合うこと。日誌をつけたり帰宅前に瞑想の時間を持つたりして、気分転換を図る工夫もしています。自分を少し客観的に見つめたり心を解放したりするために、キリスト教から離れて心理学などの勉強会に参加することもあります。

「死」という限界を目前にして、私たちにできることは

——限界を見極めるというのは、できることを精一杯した後は神様に委ねるという意味ですか。

今城 そうですね。私もここに勤めているうちにどんどん目標点が上がっていつて、自分で自分を追い込んでしまうことがあります。熱心な看護師さんほどそうして燃え尽きてしまうケースもある。特に緩和ケアという仕事では、患者さんは治らずに亡くなっていくのですから。でも、たとえ自己評価が60点だったとしてもベストを尽くしたのであれば、次につなげられます。

——人の死に毎日直面してこられた今城さんは、死というものをどう捉えているのでしょうか。また、私たち生きている者は死から何を学ぶべきなのでしょう。

今城 自分はやがて死んでいく存在であることを常に見つめておかなければいけないと思います。死を見つめることは、実はどう生きるべきかを考えることでもあります。人生には解決できない問題もある。解決できることと、できないことの区別を見極めることが大事です。人間は「喪失する」ことが避けられない存在なのです。出会うということは別れの始まりでもあり、何かを得るだけでなく、

失うこともある。その避けられない「喪失」にどのように対応していくかは、人生の転機をどのように迎えるかに現れる。喪失は人生の一部であり、人生に変化を起こすひとつの出来事でもあります。同様に、人間は結局一人で死んでいかねばならないという孤独を見つめる時も、そこに救いがないのではなく、そういう人間同士が支え合うことが大切なんです。

——自らの命の限界に直面して、生き方に変化のあつた患者さんもおられますか。

今城 仕事ひと筋だったある男性が、がんを告知された当初は全国のがん治療専門の病院を飛び回っておられたんですね。でもそのうち、がんと闘っていて自分自身も弱っていく一方であることを知り、今度は残された時間をご家族と共に過ごそうとされた。小さいお子さんに対しては、少しでもお父さんとの思い出を残そうとされた。事情があつて家族と離ればなれになっていった患者さんは、死を前にしてもう一度家族と会いたいと望まれました。やつと見つかったご家族が病院に二晩泊まられて、その二晩目にご本人は亡くなられた。亡くなる少し前まで、ずっとご家族に謝り続けておられました。人生には色々あつたかもしれませんが、最期によりやくご家族と会えて

和解できたわけですね。ただ、本や雑誌などで紹介されるのはこういう劇的なお話や美談が多いですが、そういう方は少数です。迷いや不安の中で亡くなる方、意識のないまま亡くなる方も大勢おられます。やはり死は残酷なものです。

——日本でもターミナルケア病棟は増えているとはいえ、魂のケアまでしている病院は少ないと聞きます。今後このような病棟が増える動きはあるのでしょうか。

今城 スピリチュアルケアのスタッフを専属で置く病院は、なかなかないですね。公立病院では宗教色を打ち出しにくいでしょうし。様々なところでスピリチュアルケアに関する研究会があつて活動しているようですが、身体の症状コントロールに比べると、まだまだ十分とはいえません。医療現場ではどうしても数字によってアセスメントを行い、効果を測っていかないと、何もしていないかのようになってしまう。最近では患者さん個人の物語性にも関心を持つという動きも始まっていますが、基本的に医療現場は科学的な世界ですから。少し違った視点に立つスピリチュアルケアを医療に採り入れていくためには、私たちがもっと努力していかないといけないでしょう。

——現在の病院で、今後取り組んでみたい計画などはおありですか。

今城 グリーフケアの充実です。いま看

護師の中にグリーフケア係を作り、月に一度勉強会を開いています。今後はそれを少し展開させて、私も含めたスタッフのセルフケアができるような場を作っていきたい。スピリチュアルケアをもっと世間に知っていただくために、どうすれば効果を測れるのか、評価できるのかということも考えています。

今スピリチュアルケア専用のカルテを作っていますが、これは全国でも珍しい試みかと思っています。患者さんとの会話を記録し、そこから問題を抽出して、ケアプランニングに役立てる。さらに、個々の患者さんのケースを通して私たちスタッフは何を問われているかを考えるようにもしたい。たとえば「生きる」とは何か、「赦す」とは何か。一方的に患者さんに対して何かをしてあげるというのではなく、患者さんもスタッフも同じ立場の人間として共にいるということが、私たちの基本的な考えなのです。

自分にはできない
尊い生き方を大切に

——そもそも同志社大学の神学部へ進まれたのはどんな動機からですか。
今城 アカデミックに色んな人を受け入れているという点で同志社の神学部に魅

力を感じました。神学を勉強しようと思

ったのは、キリスト教徒の家庭で育ったこと、自分の名が聖書の登場人物「イサク」になぞらえたものであるように、キリスト教が常に私のアイデンティティーにつきまといてきたこと、大きな病気をして何度か手術をしたので命のほかなさを考える機会があつたこと、などが影響していると思います。そういうキリスト教についていったい何なんだという疑問に、社会に出る前に決着をつけたかった。学部では深田先生のゼミで学び、大学院では組織神学で生命倫理を扱いました。

——牧師になろうと決意されたのは。

今城 様々な場所で教会の牧師にお世話になりましたが、特に大学院の最終学年の頃、名古屋の愛知教会に通っていて、そこで出会った寺田恵英牧師から受けた影響も大きかったですね。信徒に対して厳しく怒ることもあれば、自分が間違っていたと思えばその場で素直に謝る。寺田牧師が行き詰まっておられた時、礼拝が始まるのに出てこれられないから見にくと、一人でずっとお祈りしておられる。自分は何もできない、何も語れない、助けてくださいと。その正直な姿に大きな感銘を受けました。非常に人間味あふれた方でした。現在は松山教会におられます。

——今まで感銘を受けられた本や言葉は。
今城 北海道家庭学校の校長をしておられた谷昌恒先生の『ひとむれ』という随筆集が好きで、よく読みました。現場に根ざし、自分の感じたことを自分の言葉で語りたいという私自身の思いに重なる部分がありましたので。苦しみの中で見出せることも多くあるのだということ、を、この本からも学びました。

それから大学4年生の秋に父がリストラに遭つて以来、私は銀行の床掃除のアルバイトを2年間続けたのですが、あるとき仕事を終えて帰る車の中で、父と同じようにリストラされた60代の方が突然おっしゃった「このアルバイトがあなたにとって、将来どんな役に立つかは分からない。でも、掃除でも他の仕事であつても『今、あなたにしかできないことをやっている』と思つて頑張りたいよ」と。考えてみれば思われている部分も多かったはずなのに、当時の私はどこかいじけていたんですね。「あなたにしかできないことがある」という言葉を聞いて涙があふれました。今もその言葉を自分自身に問い続けながら、毎日を模索しています。

（聞き手・當村まり、6月22日長野・愛和病院）